村井琴山先生の事蹟

難波[1]　恒雄・浜田[2]　善利

村井琴山は名は椿、字は大年、椿寿と称し、琴山と号した。肥後の医家村井家の第三代であって、復陽と名乗った村井見朴の長子である。享保十八年癸丑（一七三三年）七月十六日に生まれ、文化十二年乙亥（一八一五年）三月一日に没した。享年八十三歳。墓は熊本市春日町の万日山にある村井家墓地の中央に現存している。

先代の見朴は、細川藩第八代藩主重賢の学芸振興の意をうけて、藩の医学教育機関である再春館の創設と経営に係わり、肥後の医学生の養育を確立した。しかし、この頃すでに失明していた見朴を扶けて、その一大事業を完成させたのは、蔭にあった長男の琴山であった。

琴山は再春館においては、宝暦十二年（一七六二年）二月から同年十二月まで講釈方を、享和三年（一八〇三年）八月から同年十二月まで師役および吟味副役を務めた。しかし、長く在職することはなかった。一方、二十七歳で京都の山脇東洋に教えを乞い、東洋の没後、三十一歳で吉益東洞に師事して古医道を研鑽、それがかえって官学と相容れざる風を生んだ。見朴以来の家塾の復陽洞を、寛政十年（一七九八年）に原診館と改め、新たに原診館七則を立てて塾生の指導に励み、善音堂の薬物会を主催するなど、中央の学者との交流も深く、晩年は島崎村に叢桂園を営み、藩内外の文人との交わりも厚かった。

琴山の業績等に関しては、山崎正董、山本十郎らの論述があるが、著書の中には「和方一万方」、「熊府薬物会目録」等の処方および産物を扱ったものもあるので、薬学の分野からみた琴山の事蹟について述べ、医家、本草家から、ひいては文化人としての琴山を概観する。

1)（富山医科薬科大学和漢薬研究所）
2)（熊本工業大学）